

石綿工場が存在していた地域に 起こった「地場産業」の悲劇

堺市麻袋再生業石綿環境被害

古川和子

中皮腫・アスベスト疾患・観派と家族の会会長

2005年6月の「クボタショック」報道により、かつて尼崎市内にあった「クボタ旧神崎工場」周辺に住んでいた住民の多数が石綿被害を受けていることがわかった。クボタショック報道以後、大阪府泉南地方の被害発覚とともに、日本中の各地で同じような環境被害が続々と報告され、大きな石綿製品製造工場（ニチアス、竜田工業、エーアンドエーマテリアル等）周辺の被害の大半は表面化してきたと思っていた。

環境省も、私たち患者と家族の会や地域住民たちの要請を受けて、石綿工場が存在していた7地域（大阪府泉南地域と河内長野市、尼崎市、鳥栖市、横浜市鶴見区、羽島市、奈良県、北九州市門司区）で「石綿の健康リスク調査」を実施してきた。そしてその調査に、今年度から大阪市が対象地域として加わり、来年から堺市も参加することになった（ポストリスク調査の「フィジビリティ調査」）。今年度の調査に間に合わなかった堺市は、「今年度は堺市独自の石綿アスベスト検診を実施したいと思えます」と発表した。

しかし、ここに至るまでは、数々の出会いとドラマが繰り返されてきた。

石綿入り麻袋の再生作業

2008年5月の初め頃、ある女性から「義父が腹膜中皮腫で死亡しています」と関西労働者安全センターに相談があった。夫の父である下野芳治さん（当時76歳）は、2000年に腹膜中皮腫を発症、2002年1月に死亡したという。芳治さんは、1958～60年、石綿用の麻袋を再生する堺市の商店に勤務し、石綿を吸い込んだとみられる。その後、独立して、一時期その下請け作業を続けた。

遺族はその後、石綿関連がんと知ったが、「元請けの商店が小規模で、1974年に倒産したので労災認定の対象外と思い込んでいた」という。本来ならば商店の規模や倒産に関係なく認定の対象になったのだが、労災の時効は労災保険法で死後5年と定められている。そして、石綿救済法の時効救済でも、同法施行から5年前にさかのぼる2001年3月27日以降の死亡は救済されない状況だった。しかしその後、支援団体の尽力により時効の請求期限の時効が延長され、下野さんも救済対象となった。

環境被害者との出会い

下野さんとの出会いからしばらくたった同年6月12日、私の携帯に、女性中皮腫患者から電話がかかってきた。「胸膜中皮腫です。すでにステージIVで手術もできません」という電話の主は、当時50歳のM子さんだった。

Mさんは大阪府立成人病センターで受診していたが、最初の症状が出たのは5年前の2003年だった。胸水の貯留で地元の堺市立病院にかかっていた。その後、胸水が貯まるたびに抜くなどを繰り返してきた。しばらくその状態が続いたあとに胸膜生検を行い、中皮腫と確定した。2008年5月だった。症状発生から5年が経過していた。すぐに大阪府立成人病センターを紹介されたが、このときは病状が進行していたために、治療の選択肢は限られていた。Mさんの確定診断が遅くなった理由のひとつは、「アスベスト曝露」が認識されていなかったからだった。

私は、Mさんの希望で、アスベスト曝露の原因を調べた。Mさんは独身で生家に高齢の母親と暮らしていた。家業は父親の代からの「家電用品販売店」で、店は長兄と次兄が引き継いでいる。他に近隣に貸しガレージ等も所有している。地元で古くから居住している一家である。

「医師から、家業の電気屋が原因かもしれないと聞きました。もしそうであれば、哀しくて申し訳ないことです。父親や兄たちが一生懸命に働いてくれたのに、私がこんな病気になってしまっ」と声を詰まらせたM子さん。「大丈夫、きっと他に原因があるはず」と励まして、長兄からも聞き取りを行った。

当然だがMさんの職歴には何もなかった。家業の電気店は、家庭用照明器具、炊飯器、トースター等が展示してある「街の電気屋さん」だ。兄たちの「工事」は買ってもらったエアコンの取り付けに行く程度。家庭内曝露は考えられない。

話を聞いているうちに、妙に気になりはじめたことがある。それは、前述の下野さんの労災認定事業場が1kmあまりの距離に存在していたことだ。しかし、1kmを越しての石綿飛散を考えるには、工場の

規模が小さく、石綿入り麻袋の再生作業頻度も未確認な状態だった。

下野さんから聞いた話を思い出しながら「他にもあるかもしれない」と思った私は、Mさんに「ほこりの舞うような工場はなかったですか?」と尋ねた。下野さんのケースを説明した。すると「以前、家の裏で同じような仕事をしていた工場がありました」との返事。

Mさんの自宅裏にあった工場は「藤田商店」という麻袋再生業者だった。そして、Mさんの記憶よりも、6歳年上の長兄であるHさんの記憶はより鮮明だった。「麻袋のほこりを叩いて、ナイフで裂いて、必要なかたちにつくり変えていました。麻袋に目詰まりしたほこりを取り除くために、大きな送風機が工場の庭に設置されていた。麻袋の中身については、穀物もあったようで、そのときはスズメたちが散乱している穀物を食べに来ていました。スズメが来ないときは、石綿だったのかもしれませんが」と語ってくれた。Mさんの部屋にも案内してもらった。Mさんの部屋のベランダから外を見ると、かつて存在していた再生工場が目の前だった。

「ありがとうございます」と涙ながらに感謝するM子さん。家業が原因で病になったのでは、と心を痛めていたMさんは、やっとその重荷を下ろすことができたという。しかし、原因がわかったとて、治療法が変わるわけではなく、工場が移転した工場事業主に賠償責任を求めるにはかなり厳しい。

2人目の被害者

Mさんと出会って2か月あまり経った10月25日、尼崎支部の集会でS子さん（56歳）と出会った。そして、S子さんとの出会いが、「麻袋環境被害」に確信を持つ大きなきっかけになった。「仕事でアスベストを吸ったことはありません。現在は大阪市に住んでいます。30歳まで堺市に住んでいました」と自己紹介したS子さんの言葉に、私は大変動揺した。集会の後で聞き取りを行った。S子さんの生活圏はMさんの近所だった。

Mさんの自宅から200mの距離に「ヘッシャン商事」という変わった名前の事業場がある（麻布の

ことをヘッシャンという)。麻袋再生作業を行い、ミン掛け等をしていた従業員が、中皮腫で労災認定を受けていた。かつてM子さんは、この工場の横の道を通って幼稚園に通っていた。M子さんは、藤田商店とヘッシャン商事の両方の石綿を吸った可能性がある。

ふたつの事業所からS子さんの自宅は少し離れていたが、母親の身内がこの近隣にあり、毎日来ていたという。さらに、S子さんの父親が一時期、ヘッシャン商事にトラック持ち込みで運送の仕事をしていた。S子さんも、助手席に乗って同行することもあったという。

実態解明へ

2008年12月26日、年末も押し詰まった頃に毎日新聞の大島記者と関西センターの片岡さんたちとともに移転先の藤田商店を訪問した。突然の訪問に社長は驚いていたが、いろいろと話をしてくれた。

M子さんの裏にあった藤田商店は、現社長の父の代からの老舗だ。社長の父母が結婚するときに母方の祖父から「暖簾分け」をしてもらった。一時期は多数の従業員がおり、そのなかで運転手をしていた人が中皮腫になり、労災認定されている。仕事を手伝っていた親族にも肺がんで亡くなった方がいる。社長自身も数年前に呼吸器専門病院に入院して検査したことがあるという。話の内容を推測すると、胸膜ブランクか胸膜肥厚だろう。定期的な検診を行っていると言っていた。

社長の話はとても参考になった。藤田商店はかつて尼崎のクボタ旧神崎工場から使用済みの麻袋を落札して持ち帰っていた。数量は、一回の入札で4,000枚から5,000枚だ。かつて中に入っていたのは白石綿と青石綿で、石綿の種類により、袋の大きさが違っていた。青石綿入りだった麻袋の方が単価はよかったという。

持ち帰った麻袋は、清掃作業をするために叩いて、送風機でほりを飛ばして、包丁で裂いて広げる。それを数枚ずつ縫い合わせて、一枚の大きな麻布に作りかえる。この再生麻袋のかたちは、使用目的により多種多様にあるそうだ。このような麻袋



麻袋再生工場前での写真、右隅に麻袋が写っている：左女性は熊取さんの祖母、その前が熊取さん、後ろがその姉、その右が川崎さん

再生作業は、戦前から、PP製品に切り替わる昭和40年代後半まで行われていた。

社長の話のなかで多くの再生業者の名前が出てきた。さらに私たちは、ヘッシャン商事の関係者である高齢の男性を訪ねたら、「大阪ではたくさん業者がいた。主に南部方面に集中していた。全部で90か所はあった」と教えてくれた。大阪は石綿工場が多かったため、それに比例して麻袋再生工場もあったのだろうか。

しかし、患者であるM子さんが2009年6月、S子さんも翌2010年4月に亡くなった後は、麻袋再生作業の実態解明は頓挫していた。

繋がった被害者(西成区から堺市)

2013年11月のある日、事務所に電話がかかってきた。相談者は開口第一声「子供の頃、実家がゴロスをやっていた」という。「え?ゴロスって、麻袋ですか?」「そう、ゴロスです。親がその仕事をやっていた石綿肺で死にました。私たち姉妹は胸膜ブランクがあります。従姉妹もあります。自費で検診を受けていますが、何とかならないのですか?」とい



麻袋を手説明する熊取絹代さん(左)と川崎千津代さん(2014年4月15日の記者会見で)

う内容で、電話の主は、川崎千津代さん(当時55歳)だった。

2013年9月5日に西成区の工場周辺住民被害の問題が大きく報道された(2013年12月号参照)。川崎さんは、そのときの新聞記事を切り取って持っていたのだ。11月のある日、いつものように定期検診に行くと、CT検査まで行い、高額の治療費を支払った。そのときに、切り取って持ち歩いていた新聞記事を思い出して電話を架けてきたという。「大阪市のように検診費用だけでも」という川崎さんの訴えに、片岡さんとともに聞き取り訪問し、話の内容に驚いた。川崎千津代さん姉妹と従姉妹の熊取さんたち3人には、かなり明確な石灰化胸膜プラーク所見があったからだ。労働者でもないのに何故?

使用済み麻袋が入荷すると、まずは付着しているゴミを取る作業をする。その後、麻袋を裂いて一枚の布にして、再利用する物の大きさ別に裁断して、ミシン縫製をして仕上げる。最初は、麻袋に付着している石綿を吸い取る作業をするために、集

塵機のところに麻袋を持っていき、集塵する。「掃除機の原理ですよ」と彼女たちは言う。集まった石綿は、さらに別の袋に詰めて販売していた。

この工程で若い彼女たちは「お手伝い」をした。集塵機の前で二人一組になり、袋の口を広げていた。勢いが強い集塵機の前で袋を広げることは大変な力が必要だった。幼い子供たちには数枚が限度だったという。その後、お駄賃をもらって近所の駄菓子屋さんに走った。

あるときは、集塵を終えた麻袋の上で寝転がり、飛び跳ねて遊んでいた。「まるで、乾草の上で飛ぶ跳ねるアルプスの少女ハイジみたいでした」と回想する。親が近くで仕事しており、機械工具などの危険なものは何もない安全な場所だった。「麻の臭いは父親の臭い」と語る熊取さん。父親が大好きだったから、職場にも頻繁に出入りしたという。そこで嗅ぐ麻袋の臭いは、懐かしい父親の思い出となっている。

堺市のある地方では、親族一同が麻袋の再生

作業を行っていた。この仕事は特殊な設備も高度な技術も必要ない。必要なものは、土地と家屋と工業用ミシンと労働力だけだった。親族同士で、あるいはご近所同士で仕事を分け合っていた。熊取さんと川崎さんたちの実家もそうだった。子育てをしながら家業に勤しむ…旧来の姿がそこにあった。しかし、数十年後、熊取さんの父親と川崎さんの母親が兄妹同士で石綿肺に苦しみながら最期を迎えるとは、誰が想像できただろうか。

麻袋再生作業被害の報道

2014年4月15日、衝撃の記者会見が行われた。記者会見の内容は、かつて石綿の入った麻袋が使用後に清掃、再生されて再び流過程で使用していた。そして、その再生作業の時に発生する粉じんを吸引して、工場の労働者や家族近隣住民を含めて14人が石綿被害を受けていると発表した。もちろん、M子さんとS子さんも含まれている。

記者会見の席上で「親が働いていた使用済み麻袋の再生工場内で、積み上げられた麻袋の上で、アルプスの少女ハイジのように飛び跳ねて遊んでいた。とても安全な遊び場だと思っていた」と語った熊取絹代さんと川崎千津代さんの言葉に、取材している関係者も息を呑んだ。

1950年代から1970年代までの期間、使用済み麻袋を回収してきて、清掃・加工する作業が頻繁に行われていた。当時麻袋は流過程において貴重な存在だった。石綿が輸入され、石綿製品製造工場で使用された後の空になった麻袋は、かたちを変えるなどして、各分野に再利用されてきた。その過程で、熊取さんや川崎さん達の親も行った「ゴロス屋」という仕事成り立っていた。

健康リスク調査の実施

石綿入り麻袋再生という仕事があることを知ったのは、2008年5月に会った下野さんがきっかけだった。その後、M子さんという中皮腫女性患者からの相談電話があった。M子さんと出会った直後には、S子さんという中皮腫女性患者とも知り合っ



た。この二人と出会い「もっと他にも被害者はいる」と確信したものの、その当時はそれ以上の調査はできなかったし、被害者の姿も見えなかった。それゆえに、6年の歳月を経て再生麻袋の被害が表面化したことは感慨深いものがある。さらに、川崎さんが電話をかけるきっかけになったのは、大阪市西成区の工場周辺住民被害の報道が大きく影響していた。

川崎さん姉妹と熊取さんたちも、多数の石灰化胸膜ブランクで苦しんでいる。彼女たちは、風邪をひいたら治りにくい、咳き込んだら苦しいなどと不安を訴えている。救済の道は確立されていないが彼女たちの熱心な訴えにより、環境省が行っている「石綿の健康被害リスク調査」の引き続きで2014年度からはじまる「フィージビリティ調査」に堺市も参入することが決まった。

連綿と続く石綿被害を象徴しているようなこの事案に、あらためて継続する事の意味を感じている。患者と家族の会が誕生して10年経ったが、被害者の掘り起こしはまだ不十分だ。この10年を振り返ると、いまはまだ通過地点なのだと感じる。

(2014年9月22日 記)

